



お互いに床を舐めるような姿勢で、おれは彼と対面していた。

間に行司が居さえすれば土俵上の光景に近い。とくに彼は両手を地につけ、両足のばねに力をこめた前傾姿勢であったために、余計に力士に見えた。身体のサイズでみれば両者ともまるで違うが、その瞬間おれの気迫だけは確かに「まわし」を締めていたように思う。

ただし、彼の澄み透った銅色の瞳にはなぜか警戒の色がなかった。鏡が目の前の対象をうつしとるように、すなおにこちらを見据えていた。

窓から差し込む白い日差しが、交差する視線のちょうど中間地点を分断する。

これがおれたちの出会いだった。

八時間前。つまり十一月十日。

おれはひどく酔っていた。

一昨年から描き続けていた一枚の絵が、ようやく完成した夜だった。ひとりでその祝杯をあげていたのだ。まず手始めに松屋に入り、カウンターで瓶ビールを頼む。つまみには牛皿。二本開けたところで店を出、吉野家に入る。頼んだのは瓶ビールとおしんことサラダ。その次になか卯、福しん、バーミヤンとはしごする。

巨大な桃の看板にたどり着いた時には、もうへろへろだった。

元々酒はつよくないし、好きでもない。が、この日だけは吞まずにはいられなかった。

バーミヤンを出てから家までの路で、おれは街路樹に抱きついた。つぎに電柱に抱きつき、そのつぎにあきらかにその筋らしきおっさんに抱きつこうとして蹴っ飛ばされた。おっさんにではなく、その背後にいた壁のような男にやられた。男はさらに腹に数発拳を入れてから、うずくまるおれを業者がゴミ処理車にゴミ袋を放り込む仕事草そのままに軽く投げ飛ばした。

おれは回転寿司屋の軒先にある垣根に頭から突っこみ、破れたスキン、よくわからない明細の束、長い髪の毛が巻きついた歯ブラシ、注射器の針先といった愉快的な連中の一員となった。

時間が経ち、それにしても喉が渴いたな、と思ったところで記憶は途切れている。そこでナーナーと、かぼそい声を聴いたような気がする。とにかく口の中が砂で濯いだように乾いていた。

目が覚めると、滝の音がした。

水道の蛇口が狂ったように水を噴き出していた。シンクには空のグラスが転がっている。帰ってから一口飲み干し、一晩中出しっぱなしにできてしまっていたらしい。

おれは畳に貼り付いた身をどうにか起こし、直に口をつけて水をのんだ。釣鐘でも被っているかのように頭が重く、体をひっぱるように傾く。

蛇口の栓をとめ、トイレに向かおうとした時、視界の端に違和感を覚えた。

いつもと同じはずの四畳一間の片隅に、見慣れないシルエットがあった。まもなくそれは伸び縮みし、ひらがなの「つ」に似た姿勢で爪研ぎを始めた。

「……何だ、お前」

座高二十五センチほどの毛むくじゃらの生物。彼もまたこちらに気づいた。

背と頭、尾は黒く、鼻には墨汁を落としたようなブチ模様がある。手足は白い靴下をはいているようで、とりわけ腹は目が覚めるような純白。よく見ると長毛で、胸のあたりは耳かきの綿のようにふんわりしている。

イーゼルが倒れ、油壺と筆洗が床に転がっていた。

自分が倒したのだろうか。いや、ともかく。その猫が機織りのようにせっせと爪を立てているのは、おれが昨夜描き上げたばかりの絵だった。二年と数ヶ月を費やしてついに完成し、あとはサインを入れるだけの状態である。形をとり、塗り直して、破棄してはやり直したそれぞれの箇所、いびつな傷が幾筋も刻まれているのは、窓から差し込む朝日のおかげではっきりと見てとれた。

猫はごろんと横になり首を曲げ、目を閉じ、毛繕いを始めた。残しがないようにくまなく丹念に舐める。舐めた箇所がまた光を溜めて、しろがね色を帯びた。

「お前……」

声に反応したのか、猫はこちらを見た。半身だけ起こした状態から、前傾姿勢にうつる。その最中も視線は定まったままだ。

部屋は不思議と手つかずの森のような静寂に満ちていた。しばらくにらみあっていると、やがて妙な音がきこえてくる。蛇口から溢れ出したものよりずっと弱々しい、それこそ森の奥深くにある小川の清流に近い音色だ。それを隣室の洗濯機の音がかき消したところで、今度は鼻が塩気を感知した。

猫はむっくりと起き上がり、透明な砂を胸元に集めるようにしてキャンバスを引っ掻き始めた。
足下にひかる黄金色の水たまりは、風もないのにゆらゆら揺れていた。
十一月十一日だった。

十二月二日。

動物病院へ行き、ワクチン接種をした。

だめになった絵を片付ける。

一月一日。

元旦から仕事だった。仕事といっても害虫駆除のアルバイトだが。例年にも増して憂鬱な年明けだった。

絵の修復にむける気力は、いまだに湧いてこない。チャーハンを食べて寝る。寝るおれを奴が見ている。

一月六日。

「家に帰ると、猫がいる」

その状況になかなか慣れることができない。

猫は、仮でマドと名付けた。いつも窓のそばで日向ぼっこをしているから。

飼うつもりはなかった。が、飼う以外にどうしたらいいのかわからなかった。外に放してやればいいのだろうが、それをどこで実行したらよいか見当もつかない。近くの公園か、はたまた河川敷か、小学校の校庭近くにも放してやれば誰かが引き取り手になってくれるかもしれない。しかし、確証はない。悩み抜いた先に浮かぶイメージは決まっていて、人気のない路地裏で仔猫が飢えと寒さにくるしみながら、そっと目を閉じていく……というものである。要するに消去法で飼い始めた。

ネット通販で専用のトイレを買った。砂も買った。ねこじゃらしも、専用の歯ブラシも。飼育に関する情報は市立図書館にあるペット雑誌のバックナンバーから得た。

さいわい初めの日以来、トイレをしくじることはなかった。

一月二十日。

マドがあばれていた。

餌皿、水の入った筆洗をひっくり返し、傘立て、掃除機、電気スタンド……倒せるものは残らず倒してきちがいのように走る。また、夜になっても寝ない。むしろ昼間よりも活発になる。

これはなんらかの病気にかかっているに違いないと獣医に訴え出るも、「性格もあるだろうが若い猫なら普通」とのこと。あと猫は夜行性らしい。

あんまりあばれるので一度首根っこをつかまえて強めに叱った。

それから二三日はおとなしくしていた。四日目からまたあばれだした。

マドを見ていると基本的には嘆息するばかりであるが、ごくたまに感心することがある。

マドは食べて寝て、遊んで、また寝る。起きてすぐ食べる。気分が乗らないときに無理やり抱え上げると、両手足をつっぱって拒絶する。逆に全くの無抵抗でお腹をいくらいじくってもトロンとした目で甘い呼吸をしている時もある。つまりマドは全く芝居をしない。いつだって素のままなのだ。

自分自身を振り返ると、そこに横たわっているのは地方巡業する旅芸人かというくらいに芝居漬けの人生だった。

小学生の頃、妹が事故で死んだ。

それ以来、おれはある行動にとりつかれた。

「考える」ということである。

妹の死ではなく、それにまつわる謂わば哲学的ともいえるまとまりのない、世間的には何の役にも立たないこと

を考えてしまう。正しいといわれていることは、なぜ正しいのか。よい、といわれていることはなぜ、誰にとってよいのか。死ぬということとはなぜ悲しいのか。

死んだ者が気の毒だから悲しい。

それはどうか、おれにはわからない。死んだことがないから。本人がどう思っているのかはさらにわからない。幼くしてこの世から去ったといっても、生きていて幸せだったかは誰にもわからない。

死んだ者にもう会えないから悲しい。

これもよくわからない。おれと妹のプーは、そもそも何故か出会っていた。兄妹として。それがもう会えなくなったからといって、悲しいとはならない。出会いの方がよっぽど不思議だからだ。なにより、会えたということはやがて会えなくなるということだ。

それらの問いにはいずれももっともらしい——かつ向こうの景色が透けて見えるほどに薄っぺらな解答が用意されており、大人の示すままに受け入れれば済んだのだが、おれはなぜかそれが耐えられなかった。

ただ一度は世間のルールに則って暮らし、働くことに成功した。

当然のことながら日々考え続けているだけでは暮らしが立たない。「薪割り」とは、「斧」とは何かと胡座を組んで考えているのでは、いつまでたっても暖炉に火は入らない。

三年前まで小学校で教師をしていた。教師になることは、幼い頃から演技を磨いてきたおれにとってひとつのゴールだった。常識を身につけ、道徳的に振る舞う。そして、それを教える立場までのぼりつめたという事実は、かつて「まともさ」から逸脱した子供だった自分にとって大きな自信になった。だが、その芝居も長くは続かなかった。とある少女との出会いが、忘れかけていた問いかけを呼び覚ましたのだ。

そうならないように、考えないように必死に過ごしてきた。

蘇った想念は猛烈な速度で骨に肉に神経にからみつき、身体をむしばんでいった。これは少なくとも自分にとってはおそるべき事態だった。想像してほしい。考えることを頭から取り除く、ということがどれほど困難か。考えることを取り除こう、ということをするら考えないなんて誰が出来るのだろうか。「苦悩さえ、私のは、わけがわからない。」そう書いたのは太宰治だったか。

そのわけのわからぬ苦悩を除去するための一助となったのが、絵画の世界だった。

具体的には、エドワード・ムンクの絵である。NHK「日曜美術館」で紹介された作品群に心奪われた。翌日すぐに展覧会に足を運び、一日じゅう絵の前で過ごした。

『孤独な人たち』『星の夜』『太陽』『不安』。

ムンクの代表作のひとつである『病める子』には、教師時代に出会った凶鑑ちゃんと呼ばれた子、そして妹のプーの姿を重ねずにはいられなかった。赤毛の少女、少女の前で頭を垂れる母親、どこまでも真っ白な枕。それらがいつか観た、懐かしい風景のように思えてならなかったのだ。

絵のセンスや技術を褒められたことは一度もない。自分でも上手いとは思わない。才能の有無は、納得のいく作品を仕上げようと考えている以上、気にならないことはないが、悩んでも仕方のないことだった。

絵を描くときはとにかく徹底する。一日に一度、かならずキャンバスに向かう。それが最低限のルールだ。隙間風の吹き込むあばら屋の中で、一度ともした口ウソクの火を何があっても決して消さないように……。

それは皮肉にも子供の頃、ひたすら考え続けていた時の感覚に似ていた。

二月十六日。

マドは日に日に成長している。からだが一気に長くなった。体長は二倍になり、両目から鼻までの距離が伸びて

、ぐっと大人の顔立ちに近づいた。

それと、やっぱり夜になっても寝ない。代わりに昼間たっぶり寝る。

おかげでこっちは寝不足である。

毎朝ふらふらの頭を布団から引きはがし、顔を洗い、靴下を探す日々だ。

そう、この部屋ではよく靴下が消えた。しかも決まって片方だけ。

盗まれたわけでも、洗濯槽から異次元へと吸い込まれた訳でもないのはわかりきっている。そこらじゅうに画材とゴミが区別なく散らかっているからだ。

思うに、これはひとつのバロメーターになるだろう。まともな生活というのは「靴下がふたつ揃っていること」だ。

おれは今日も靴下が見つけられない。

三月二十五日。

帰ると必ず玄関まで走ってきて、足にからだをすりつけてくる。餌をねだっているのだろう。皿に餌を盛りつけると、もう見向きもしない。食べ終わるとお決まりの窓のそばに座り、しばらくしてトイレで排泄し、また定位置に戻って眠る。

顔が丸く、大きくなってきた気がする。

三月三十日。

留守中にマドが餌袋を噛みやぶっていた。叱った。ばらまかれていた餌は瓶にいれ、戸棚にしまう。

四月一日。

バイト中に巨大な鼠を捕らえる。

業務用冷蔵庫の裏に見つけたとき、本気で兎に見えた。過去に例を見ないほどの大物だったらしく、社員が集まってきて大騒ぎになった。

四月十日。

うんこの量が変わった。一度につき卵ボーロを三粒程度だったのが、数はそのままに長さが「ししとう」になった。数も増えた。

食事をする回数が増えたのだから当たり前なのだが、念のため動物病院に連れて行った。それがどうした、何しにきたんだと先生に笑われた。帰る際、受付の女の配慮に満ちた笑顔が気に食わなかった。

五月十六日、マドが風邪をひいた。

仔猫の場合、免疫が低く死亡する場合もある、と医者に言われたその日からつきっきりで看病した。

塩辛の瓶をよく洗ってお湯を注ぎ、タオルを巻いて湯たんぽをつくった。眠るときは毛布でくるみ、さらにその上から抱く。前肢を握ると、ぐたっとしている。桜色のグミのような肉球も破裂しそうに熱い。マドは鍋の拭きこぼしのような泡の鼻水を垂らし、いつまでもこちらを見つめながら、ナーナーと拾った頃と同じ鳴き声を一晩中あげ続け、朝方やっと眠った。

もう病院で診てもらふ金はない。自分一人でどうにかするしかなかった。マドは混濁しているであろう意識の

中で、やけにまっすぐな眼差しを窓の外に向けている。

ムクノ絵、『病める子』が頭に浮かんだ。絵画の中の色白の少女は、目の前の母親を通り越して窓の向こうを眺めているようにも見える。

「出て行くか」

マドは荒い鼻息で返事をする。

「お前、死ぬなんて許さないぞ。勝手だぞ。お前がおれの邪魔をしたんだ」

おれはあの晩、絵を描き終えたら死ぬつもりだった。祝杯をあげ、最後に完成のサインを入れたら部屋に戻って首を吊ろうと思っていた。計画はマドによって阻まれたのだった。

マドはまるでからだの内側に吸い込まれるように瞼を閉じた。二ヶ月後、治った。

八月一日。

この暑いのにマドはいつもの定位置で日向ぼっこをしている。

八月三日。

おれはルールを破った。マドの看病に明け暮れていた数日間、ついに一度もキャンバスの前に座らなかったのだ。

不思議と焦りはなかった。

へんに清々しい気分だった。あらゆる物事をあきらめて守り抜いてきたロウソクの灯が、ふと通りがかった猫の鼻息によって吹き消されるとは思ってもみなかった。そもそもおれのこだわっていた芸術上の良心など、ドロップアウトした自分が社会へ向けた恨み節か、モラトリアムを続けるための言い訳でしかなかったのかもしれない。

水分をこまめにとってくださいね。

朝のニュースで薄着の女子アナが呼びかける季節、おれは職業安定所に通い始めた。

九月三日。

マドが手や足を噛むようになった。前々から噛むことはあったが、生え変わった牙で噛まれるとかなり痛い。

また図書館で雑誌を読み、対策を練った。

どうやら噛む理由には様々あるようだ。かまってほしいか、お腹がすいているか、それとも別のストレスが原因か。

また、一匹飼いの猫には他の猫と戯れる機会がないため、噛む時の力加減がわからないらしい。

「甘噛みでやり返すといい」との記載があったので、さっそくためしてみる。すると、目玉をまんまるにしたキョトン顔。呆然としていた。期待通りの反応にしめしめと思っていると、その晩、マドは餌に手を付けなかった。餌皿の近くまで連れていっても、ぶいとそっぽを向く。ハンストである。よほど噛み返しが気に食わなかったのか、自分の命を盾にしての捨て鉢な抗議を始めたのだ。

さいわい翌朝、大量に食べた。

十月二十二日。

仕事から帰ってくると、いつものようにマドがすたすたと玄関まで来た。こちらの顔も見ず、黙ってからだをすりよせてくる。

おれは戸棚から餌袋を取り出し、スプーンで皿に盛りつける。その間にもマドはしきりにからだをふくらはぎや背中にすりつけてきた。

「わかったから。ちょっと待て」

よっぽど腹が減ってるんだろうと思い、少し多めに盛りつける。皿をダンボールの台に載せた。横に置いてある飲み水の器が、抜けた毛や埃で少し汚れていたの、一度濯いでから水を入れ替えた。

マドは皿に近づいて匂いをかぐも、またすたすと歩いてきて、おれの膝に跳びのる。

「なんだ。ごはんじゃないのか」

トイレだろうか。いや、それなら勝手に行くはずだ。砂は昨日取り替えたばかりだから「しづらい」こともないだろう。何より、さほど切迫した様子ではない。前肢を折り畳んで座り、のんびりと目を細めている。

「ごはんじゃないのか」

暖房器具のない部屋で、太腿の上だけがあたたかい。

十一月十日、寝転がってテレビを観ていた。

玄関ドアの郵便受けからはみ出した各種請求書が、灰色の風になびいていた。

マドは例のごとく窓辺に腰を下ろし、前肢を左右順番に舐めている。

「マド」

呼ぶと、こちらを見る。耳をぴんと三角にたてて。立ち上がって向かってくることはない。

おれは寝たまま、からだを回転させることによってマドの方へと進んだ。つかまえて「たかいたかい」するように持ち上げる。マドは抵抗して肉球を喉に押し当ててくる。が、眠気が勝ってうつらうつらしている。

そこでおれは見つけた。

マドが寝そべっていたところの床に、平たくのびた片方の靴下があった。それは体温によってアイロンがけされていた。

その日、おれはついに靴下を見つけたのだった。



開け放つ窓

<http://p.booklog.jp/book/100278>

著者：堀内幸太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/syrup0117/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/100278>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/100278>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ